

〈書 評〉

Bob Goudzwaard, *Capitalism and Progress; A Diagnosis of Western Society*, Wedge Publishing Foundation, Toronto, Canada, and William B. Eerdmans Publishing Company, Grand Rapids, Michigan, 1979, xxxvii + 270pp.

ハウツワールト『資本主義と進歩—西洋社会の一診断』*

山 本 栄 一

I 背 景

1. 本書をとりあげた背景

わが国のプロテスタント・キリスト教界は主にアメリカのリバイバル運動の様々な教派の海外伝道の志の中から生れ育ってきたことはよく知られている。それが明治、大正、昭和を通じて、わが国に大小さまざまな教派を生み出し、第二次大戦後、一層の多様化の原因となった。この中であって、旧日本基督教会は、John Calvin (1509—64) を中心としたジュネーヴの宗教改革に端を発したプロテスタントの一大教派、ヨーロッパ大陸では改革派教会 (Reformed churches), イギリス・アメリカでは長老教会 (Presbyterian Churches) と呼ばれる伝統に立つ教派 (denomination) として成立してきた。カルヴァ

* 本書については、1986年度関西学院大学共同研究「現代に生きる宗教改革の伝統と遺産」研究懇談会が1986年9月8日(月)～10日(水)、関西学院千刈セミナーハウスで開催された際に概要報告した。そこでの発表をもとにして本稿をまとめた。

ンの考えは、決してこのような教派の中にとどまることなく、広くキリスト教会全体、さらには思想界に影響を与えてきたが、特にこれらの教派は、カルヴァンの建てた伝統に絶えず立ち帰ることを志して、時代に生きるキリスト教信仰が覚醒されることを求めるという特色を示してきた。

旧日本基督教会は昭和16（1941）年、政府による思想信条の国家統制活動の一環として、日本基督教団としてプロテスタント諸教派が統合された時に解消し、敗戦後これらの統制が法的根拠を失った時にも再び旧教派に戻らなかった。そのため、この教派にかつて属した諸教会は、戦後さまざまな動きをすることになるが、その中から自覚的にカルヴァンの伝統に立った改革・長老系の教派を立てようとした一群の教会は、それぞれ日本基督教団を離れ、昭和21（1946）年日本基督改革派教会を設立した¹⁾。

この教会は、旧教派が基本的にそうであったようにアメリカの長老・改革派系教会の影響を受けながらも、世界にあるカルヴァンに繋がる教会と交わりを持ち、特にカルヴァンの伝統に堅く立つことにおいて独特なプロテスタント国であるオランダとの交わりから多くの刺激を受け、その伝統を吸収し始めた²⁾。

オランダは宗教改革時代にカルヴァンの教えにもとづく改革派教会の設立によって、スペインから独立したことからも分るように、カルヴァンの強い影響下に教会も国家も建設されてきたが、今日、あらゆる意味でカルヴァンの伝統を集中的に受け継いだといわれているのは、19世紀初頭にフランス革命につづくナポレオンの支配の下で、共和国から立憲君主国に体制を変えたことに端を発する。国家が教会をも支配しようとする中で、教会が国家からの自律性を強く要求するというカルヴァンのジュネーヴでなした戦いを19世紀のオランダで体現することになり、カルヴァンの伝統を現代に受け継ぐ大きな中継点となった。

その中心人物がアブラハム・カイパー（Abraham Kuyper, 1837—1920）である。彼

- 1) 小野静雄『日本プロテスタント教会史』下巻（昭和篇）、聖恵授産所出版部、1986年参照。これは改革派所属の牧師が旧日本基督教会の歴史を主軸にプロテスタント教会のあり方をたどった好著で、結果的に下巻は日本基督改革派教会設立の必然性を主張することにもなっている。
- 2) オランダ改革派教会を通じるカルヴァンの流れを主に神学的伝統を通じて展開したわが国唯一の書物として次のものがあげられる。渡辺公平『カルヴァンとカルヴィニストたち』小峯書店、1973年。

はカルヴァン以来の神中心、聖書中心のキリスト教信仰の復興を指導する中で、カルヴァンがジュネーブ市で実行したように、当時のオランダの政治体制の中で、「自由な国家・自由な教会」というスローガンのもとで、教会と政治の改革、さらには国家が掌中におさめていた教育を個人の信条にもとづく自由な教育といった政治社会改革を実践した。具体的には、牧師であり神学者でありつつ下院議員に選出され（1874）、オランダ初の近代政党であるだけでなく、組織政党としてはヨーロッパで最も早い部類に属す反革命党（ARP, Anti-Revolutionary Party）を結成した（1879）¹⁾。他方では厳格なカルヴァン派教会を国教会から分離して設立し（1892）、教会改革に当ると共に、国家からもそして教会からも自由な大学として、私学のアムステルダム自由大学を設立して（1880）、信仰覚醒による自由な教育を整備した。彼自身やがて4年余（1901—1905）、オランダ独自の連合政権の首相として困難な政治の責任をも負った。

このカイパーにおいて、カルヴァンの伝統である神・キリスト・聖霊という三位一体の神が、この世界と人間を創造されたにもかかわらず、人間の責任において罪に墮落したものを、イエス・キリストの十字架と復活を通して人間を救う恵みを与え（特別恩恵）、同時にこの世界が罪の腐敗に陥りその秩序が破壊されないように摂理し保持される恵み（一般恩恵）をこの世界を通して全てのものに与えられるという考え方を一層鮮明にし理論化し、また実践した姿をみることができる。この世界における人間存在の全領域においてキリストの主権が及んでおり、それからまぬがれるものは何もないとするカルヴィニズム（Calvinism）のあり方を示したものである。

わが国にもこのカイパーの考え方を最も明確に示した彼の著書『カルヴィニズム』が、旧日本基督教会においてカルヴァンの流れを受けつごうとする高倉徳太郎（1885—1934）のリーダーシップの下で昭和7（1932）年に翻訳、紹介されたけれども、こうした流れはその後、このグループにおいてさえ継承されないままに終った²⁾。

1) オランダを連合政治のあり方の一つの典型として分析し、カイパー（原語読みでクイベルと紹介されている）に始まる反革命党のオランダ政界での活動と位置付けを含めて、オランダ政治が「多極共存型デモクラシー」と定義されてきた歴史的歩みを分析したものに次のものがある。田口 晃「組閣危機と「大連合」——オランダ型平常の政治」篠原 一編『連合政治Ⅰ』岩波書店、1984年。

2) これはカイパーが1898年、アメリカのプリンストン大学ストーン講座に招かれて講演した6つの講演からなっている。（A. kuyper, *Calvinism : Six Stone Lectures*, New York :

日本基督改革派教会は、現在教会数100余、会員数8,000余の小教派で、わが国でもささやかな活動しかなしえないものではあるが、これらの伝統と遺産を現代に生かし教会を建て、社会に仕えたいと願っている。筆者は不思議にも神の導きによりこの教会で信仰を与えられ、この教会の歴史と伝統を自覚するに及んで、こうした遺産を現代に活かす生き方をカルヴィニズムのあり方として受け入れ、経済学の研究においても生かしたいと願ってきた。幸い、日本基督改革派教会は、教会設立後の早い時期に北米キリスト改革派教会（CRC : Christian Reformed Church in North America¹⁾）と深い交わりを持っており、同教会がアメリカとカナダにおけるオランダ移民によって建てられ、カイパーのカルヴィニズムの覚醒を受け継ぐ教会でもあることから、オランダ文献もこの教会に属す人々と機関を通じて英語文献によっても知ることができる。

本書はまさしくこのような形でオランダにおけるアムステルダム自由大学のカルヴィニズムの伝統²⁾の中で書かれ、北米キリスト改革派教会の人によって英訳されたものであり、わが国においてはキリスト教界においてすら余りなじみのないものであっても、筆者にとっては以上のかかわりの中で、歴史の一つの流れに触れる思いで手にした一書である。

Revell, 1899. 上田丈夫訳『カルヴィニズム』長崎書店, 1932年。) ちなみに6講の内容は、第1講生活原理としてのカルヴィニズム、第2講カルヴィニズムと宗教、第3講カルヴィニズムと政治、第4講カルヴィニズムと科学、第5講カルヴィニズムと芸術、第6講カルヴィニズムと世界の将来。上田訳には巻末に「アブラハム・カイパー小伝」がついている。

- 1) 現在、CRC 教会はカナダとアメリカに約800強の教会をもち、会員数30万人。本部をミシガン州グランドラピッズ (Grand Rapids) におき、同地にカルヴィン神学校、カルヴィン大学を経営している。その他にも初級、中等学校とともに、大学を数校、直接、間接に経営し、信者の子弟の教育に熱心な教会であり、アメリカの中でもその特異なあり方が注目されている。現在世界20数カ国に伝道を行っているが、わが国に明治期以来伝道しているダッチ・リフォーメド教会 (Dutch Reformed) は、CRC 教会がより厳格なカルヴィニズムに立つために分離した元の教会で、正式にはアメリカ改革派教会 (RCA ; Reformed Church in America) と呼ばれ、グランドラピッズに近接する同じミシガン州のホランド (Holland) にウエスタン神学校とホープ大学を経営している。教会規模はCRC 教会に似ており、現在は明治学院大学がホープ大学と旧教派以来の関係から姉妹校提携している。
- 2) カイパー以後、オランダにおける自覚的なカルヴィニズムの歩みは、思考のあり方を聖書にもとずいて立て直す新しい哲学のあり方の追求となり、その礎石を築いた中心人物がヘルマン・ドイウェールト (Herman Dooyeweerd, 1894—1977, 自由大学の法

2. 著者と本書の特色

著者ハウツワールトの略歴と主要な業績は次の通りである。

- 1934 オランダ Delft 生まれ Institute for Economics in Rotterdam に学ぶ
1954—66 反革命党研究センター (Abraham Kuyper Foundation) 研究員
1967—70 反革命党国会議員
1970 ロッテルダム経済大学より Ph・D (*Non-Priced Scarcity*)
1971 アムステルダム自由大学教授に就任 (the department of social studies, 経済理論)
1972 *A Christian Political Option*, Wedge (1969 オランダ)
Economic Stewardship versus Capitalist Religion, Institute for Christian Studies.
1975 *Aid for the Overdeveloped West*, Wedge
1979 *Capitalism and Progress—A Diagnosis of Western Society*, Wedge/Eerdmans (1976 オランダ 1st ed., 1978 オランダ 2nd ed., この 2nd ed., の翻訳)
1980 *Toward Reformation in Economics*, Institute for Christian Studies
1981 *Types of Government Economic Policy*, I. C. S.
1984 *Idols of Our Time*, Inter-Versity Press (1981 オランダ)

上記からも分るように、著者は学界の人となる前にカイパー設立になる反革命党に属する政治家として実践の場にあり、学者としては経済理論において従来は取り扱わなかった分野で、戦後の経済成長過程で重要な問題となった公害に取り組み、市場との関係で解明を試みた論文で博士号をえて、研究をスタートしている。そこには現代経済社会の現実に対する強い関心を読みとることができる。

哲学教授)である。彼の著書のうち啓蒙的な一書が訳されている。(春名純人訳『西洋思想のたそがれ——キリスト教哲学の根本問題』法律文化社、1970。Herman Dooyeweerd, *In the Twilight of Western Thought—Studies in the Pretended Autonomy of Philosophical Thought*, The Presbyterian and Reformed Publishing, 1960.) なお、ドイウェールトの方法論にもとづいて具体的な経済問題が分析されその方策が提示されている書物も一冊、わが国に紹介されている。(R. L. ハーン著小寺武四郎監修、原正治、中園史彦、奥野博幸訳『特別引出権と開発金融』日新書房、1973, Roelf L. Haan, *Special Drawing Rights and Development*, Leiden, 1971.)

いうまでもなく、第2次大戦後の世界経済の運営は、資本主義陣営と社会主義陣営の経済競争という東西問題に始まって、体制の枠組を超えた貧しい国と豊かな国の緊張した関係からなる南北問題がからまって、複雑な様相を呈しながら展開されてきた。ある時期あった社会主義への期待も次第に色あせ、資本主義陣営が相対的優位を獲得したかに見えて、1960年代後半のベトナム戦争激化の中で、アメリカの経済的地位が低下し始め、資本主義体制においても今まで抱えていた経済問題を一挙に噴出する形となった。インフレの中の失業の深刻化、公害発生と石油供給制限に端を発した資源エネルギー多用にまつわる資源・環境問題の顕在化、国際間の貧富の差とその調整といった問題は、これまでの経済分析だけでは解けないだけでなく、現実的対応においても手さぐり状態をつづけている。

このような状況の中で、戦後経済学の主流をなしていたケインズ経済学が鋭い批判にさらされ、いわゆる新古典派経済学といわれる枠組に属する経済学が市場原理の復権を中心に、ケインズの政府介入を進める行き方を退け、自由主義経済体制の中での経済問題の処理のあり方が力を得てきている。しかし、他方では、戦後経済を指導してきた政策のあり方と経済学そのもののあり方をめぐって、1970年代に入って、部分的なものと言うまでもなく全体的な問題提起が次々になされていることも事実である。そしてその代表的あらわれとして、内容の当否はともかく、世界的にかなりの波紋を投げかけたものに、経済成長をストップする必要を訴えたローマクラブの報告(1973)があげられる¹⁾。

ハウツワールトは、後に経済学そのものの改革についての骨格を示すことになるが、

- 1) D. Meadows and Others, *The Limits to Growth: A Report for the Club of Rome's Project on the Predicament of Mankind*, Universe Books, 1972. 大来佐武郎監訳『成長の限界——ローマクラブ「人間の危機」レポート』ダイヤモンド社, 1972.
- 2) 先の著作目録の中の *Toward Reformation in Economics* (1980) に示されており、1983年度日本カルヴィニスト協会講演会でこのタイプ版モノグラフについて筆者が紹介した記録が出版されている。(「カルヴィニズムと経済学——B・ハウツワールトの場合」『カルヴィニズム(1983)』(日本カルヴィニスト協会刊: 2—6頁) なお、同協会は日本基督教改革派教会教職信徒を中心に、「イエス・キリストの主性に啓示せられる全世界、したがって又、人間活動の全分野にわたる神の主権を宣言」しつつ、「日本に於けるキリスト教的有神文化の樹立」をめざして、教会とは別の超教派団体として1954年に創設された。(『カルヴェンを継ぐもの——日本カルヴィニスト協会二十周年記念論文集1』すく書房, 1978年, 「あとがき」(205—216頁) 参照)

このような西洋の資本主義社会に集中的にあらわれてきた病弊を前にして、西洋の資本主義社会を動かす根本動因にさかのぼってその原因を究明しようとしたのが本書である。問題に対する視点は現在にあるのだが、著者の視野は実に広く、遠く中世社会から説きおこし、近代社会の特色を探り出し（第1部）、資本主義経済がその基盤において持っていた問題を指摘し、それらが現代の病弊の原因であることを論証しようとする（第2、第3部）。さらにそこから、現代社会のこれらの問題を打開する手立てについて検討し提言を加えていて（第4部）、単に経済問題にとどまらず、カルヴィニズムの流れに立つにふさわしい文明的視点からの分析がなされている。1976年オランダで出版後、特に第4部の提言に対して批判を受けた点を書きなおして、1978年第2版を著わしており、英訳本はこの第2版によって、Josina Van Nuis Zylstraが翻訳、1979年に出版した¹⁾。

4部22章からなる目次は次の通りである。

まえがき 累積と挫折 序説—問題の叙述 二つの深い水準 進歩信仰の役割	本書の内容 専門家への一言 第一部 進歩に対する障壁の破壊 1 文化の現れとしての社会秩序 非自律的技術
---	--

1) この翻訳出版の背景には次のような機関の存在がある。先に述べた北米キリスト改革派教会に属する、第二次大戦後オランダからカナダに移民した人々が、カルヴィニズムの伝統を継承し、また教会に属する青年達の教育、研究、さらにはアメリカ文化の中にカルヴィニズムのインパクトを与えることを願って、1956年カナダ、トロントに Association for Reformed Scientific Studies (ARSS) を設立した。後に Association for the Advancement of Christian Scholarship (AACS) と名称変更し、そこから小規模な大学院大学をめざし、最近修士学位のみを授与しうる機関となった Institute for Christian Studies (ICS) が1967年に生み出され、主にカナダ、アメリカであるが、全世界から学生を集め、小規模ながら活動を続けて今日にいたっている。1956年に ARSS が設立された当初から、その活動を伝える小冊子の機関誌 *Perspective* がほぼ隔月で発行されており、1986年で 20 Vols に達している。経済的困難の中にありながら大量の講義録や修士論文、その他の paper を出版し、最近ではその活動が停滞しているが Wedge という出版社によって啓蒙書や研究書もかなり出版しており、本書はアメリカのグランドラピッツにある改革派系出版社の Eerdmans と共同でこの Wedge から出版されている。

- | | |
|--------------------|---------------------|
| 中世社会の育成土壤 | 産業革命と進歩信仰 |
| 資本主義社会の育成土壤 | 工場対荘園 |
| 2 教会と天国の障壁 | 産業革命の評価 |
| ルネッサンスの基調動因 | 進歩と経済成長 |
| 3 運命と摂理の障壁 | 1850年頃 |
| アウグスティヌス | 7 社会主義者の対抗運動 |
| 自己免罪と自己啓示 | 弁証法的唯物論と進歩の理念 |
| アダム・スミスの理神論 | マルクスと疎外 |
| 古典的な経済的世界観の基本的要素 | 8 1850年以降の進歩信仰の展開 |
| 1 人間対自然 | 客観性信仰 |
| 2 都合のよい召し使いとしての自然法 | 観察でき計測できる事実としての進歩 |
| 3 調和としての均衡 | 進歩と進化 |
| 4 効用と道徳 | 要約 |
| 4 評価の間奏 | 9 1850年以降の資本主義内での変化 |
| 5 楽園喪失の障壁 | 企業内での変化 |
| 啓蒙、理性及び進歩 | 1 規模、法的構造及び大量生産 |
| 人間の完全性と来たるべき楽園 | 2 科学、経営及び技術の内部化 |
| 啓蒙の進歩信仰の基本的側面 | 3 利潤極大化から組織維持へ |
| 1 反キリスト教の態度 | 競争における打ち続く変化 |
| 2 楽園像 | 1 純粹且つ完全競争 |
| 3 実際の社会的係わり | 2 泥棒男爵の段階 |
| 革命の母としての啓蒙 | 3 自発的協力 |
| アメリカ革命 | 4 寡占、革新及び宣伝 |
| 第二部 近代資本主義の進展 | 政府对産業関係の変化 |
| 6 産業革命とその結果 | 1 構造変化—敵対から友好へ |
| | 2 自由放任の終わり |

- 3 協力と自己確認
- 4 南北と東西関係
- 結論—並行する傾向をたどる
 - 1 社会進化に対する調整
 - 2 文化的視野の狭窄
- 10 進歩、政党及び労働運動
 - 自由主義と社会主義
 - キリスト教的指導の欠如
- 第三部 進歩の失望
- 11 進歩の脆弱性—序説
- 12 環境の脆弱性
 - 挑戦としての限界
 - ローマ・クラブの情報
- 13 体制の脆弱性
 - 金本位制と自由放任
 - 金本位制から労働本位制へ
 - 失業問題
 - 功利主義の勝利
- 14 西洋人の脆弱性
 - 怪物か大渦か
 - 調節される人間
 - 1 労働における調節
 - 2 スポーツ
 - 3 性
 - 4 時間の不足
 - 結論—西洋人のディレンマ
- 15 進歩の弁証法
 - 無力のしるし
- 自由対支配
- 進歩の弁証法
- いくつかの結論
- 第四部 社会の開示に向かって
- 16 さまざまな解答
 - 革命—マルクーゼ
 - 逃避
 - 対抗文化—チャールズ・ライヒ
 - 修正
 - 1 社会の修正—ガルブレイス
 - 2 人間の修正—ガボール
- 17 容易な道はない
 - 閉鎖社会の特徴
 - 社会の開示
 - 用意された青写真はない
 - 障壁再訪
- 18 楽園喪失再訪
 - 自己正当化進歩に対する挑戦
 - 帝国主義者の進歩の崩壊
 - 経済学、技術及び科学のからみあい
 - 自由の達成度
- 19 運命と摂理再訪
 - 無制限な自由の逆説
 - 危険な疑似解決
 - 承認された規範
 - 1 経済の規範
 - 2 技術の規範
 - 3 道徳と公正の規範

経済生活の責任ある構築	小さな始まり
公共監視	広い影響
1 消費者組織	開かれた社会へ向かって
2 政府	21 教会と天国再訪
3 労働運動	生活についてのルネッサンスの見方
20 間奏—開示の可能性と限界	功利主義との絶縁
開示過程の脆弱性	22 結語

ローマクラブの報告や、わが国でもオイルショック(1973年)後に反経済成長の象徴として“くたばれGNP”といった経済成長に対する感情的とも言える批判がとび出したが、そうしたものと著者の姿勢は軌を一にしているかに見えて、著しい特徴をみせる。本書の副題である「西洋社会の一診断」が示しているように、またその点についてすでに触れたように、資本主義経済を基盤にした西洋社会全体を動かしている根本的なものは、経済体制そのものではなく、体制を支える人間集団の行動を動かす宗教的なものとして把握している点である。後に著者の考えを詳しく検討するが、それを進歩信仰 (faith in progress) と名付けており、本書の題名が『資本主義と進歩』とされている理由でもある。

3. 資本主義とキリスト教—本書との関連で

ある社会を動かす根本的な動因を宗教ないし宗教的なものとして把握するとすれば、資本主義について言えば、ただちにマックス・ウェーバーが論究した資本主義勃興期におけるカルヴィニズムの役割といった問題点が浮び上がってくる。確かに16~17世紀のカルヴィニズム的ピューリタン (Calvinistic Puritan) の倫理が、資本主義経済の主体である企業家や労働者のエートスに関係がある点是否定しえないにしても、資本主義勃興期の18世紀に入ってくるとその意味合いが異ってくる。例えば、カルヴァンの教えやその影響下にイギリスで興ってくるピューリタンでは節約・貯蓄といったことは、今日いわゆる資本主義経済発展の基盤となる投資といったことに直接結びついていないし、職業を神による召命として、世俗においても聖職者と同様の召命によって禁欲的勤勉さで働き

生きるという倫理は、資本主義勃興期におこってくる自己の利害に敏感な功利的姿勢と無縁である。カルヴァンやカルヴィニズムの教えでは、節約をすることも、その結果、貯蓄することも、十戒の要約といわれる「神を愛し、隣人を愛す」という戒めに生きることから出てくることで、貯蓄されたものは神の持物として改めて、この十戒に生きるために人に神から託されるものである。後に、このような世俗による成功を神の救いの確かさや祝福の結果とみる見方が、キリスト教社会で起ってくるにしても、それがカルヴィニズムが本来もっていたものであるとは言い難い。

著者は資本主義が18世紀中頃におこってくる点に着目し、カルヴァンからほぼ2世紀をへて、むしろキリスト教信仰そのものをつきくずして行く別の新しい信仰、「進歩信仰」と総括されるものが宗教的なものとしてとってかわるとする。その意味で著者は、資本主義とカルヴィニズムの関係では、むしろウェーバーを批判した人々と共に、その直接的関係の論証に疑問をはさみつつ、ウェーバーのいう経済世界についての「キリスト教精神」では「進歩信仰」がキリスト教倫理（カルヴィニズム）にとってかわり、キリスト教信仰そのものは現実の経済社会でのかかわりから後退していくことを証明しようとしたとすることができる。

以上のことは次のように言うことができる。資本主義の母体である近代社会は中世社会の崩壊から生れてくるが、その原因となったものがルネッサンスであり宗教改革である。中世社会では、教会は国家や経済を含めたこの世の上に立ち、教会の一元支配の下にあった。それが近代社会の成立とともに、教会は国家やこの世の支配から手を引き始める時、この世は新しい原理と精神の下で活動し始める必要がある。その具体的内容ということになれば、依然とした中世以来の教会のこの世の支配がルネッサンスをへて新しい衣粧をつけて登場してきたり、プロテスタントの倫理、特にカルヴィニズムという教会とこの世を二元的に把えないで全体的に神の主権性の下でとらえて、神の下での人間の責任を重視する考え方をとったりする。

いずれにしても、中世的な教会のこの世の支配という強力な桎梏がゆるみ、国家は教会と結びつきがあるにしても、近代国家としての両者の分離がおこり、両者は教会が上でこの世が下の垂直関係から両者が併存する水平関係に変えられる。教会、すなわちキリスト教は信仰生活の領域を支配しながら、最早、この世に対しては信仰を通じて個々

の生き方に支配力を発揮するしかなく、他のもろもろの思想、信条とも混り合い、とりわけ科学への信仰に大きく影響されて、次第にこの世、とりわけ経済を動かす信仰は、キリスト教信仰そのものではなく、近代のさまざまな要因を包み込んだ新しい原理と精神、著者のいう「進歩信仰」にとって代わられたというのである。

著者のこの考え方は、必ずしも新しいものではないが、この信仰こそ資本主義を生みだした原動力であるとともに、今日、資本主義にさまざまな困難な問題を生みだす源泉でもあったとする点で、現在の苦境を打開する道もこの信仰の解明にかかっていることから、西洋社会の将来のあり方をきめる鍵ともなっている。著者の、この「進歩信仰」が成立し現在もなお持続しつづけていることを論証しようとした意気込みが、単に学問的論証を超えて、現実への強い関心に裏打ちされている理由でもある。

Ⅱ 内 容

4. 「進歩信仰」の形成

「進歩」という観念は何も近代において初めて現われたものではないが、時代の主潮として信仰のレベルまでに達したのは、近代に特徴的である。しかも歴史において突然現われたのではなく、ダイナミックな近代とは対照的な中世という進歩とは縁遠い時代の障壁をつき破ることによって生れて来たものである。著者はここで「教会と天国」「運命と摂理」「楽園喪失」という中世における進歩についての三つの障壁とそれらが破られる過程を通して、資本主義社会の特徴を引き出しているのだから、その特徴を列挙しながら説明を加える。

①垂直社会から水平社会へ——教会を頂点とするピラミッド型の中世の垂直社会は、ルネッサンスの人間の尊厳の主張、宗教改革の教会の世俗支配の否定と人間の神の前での平等性の確認を前にして、全てを教会の手中におさめていた垂直社会の崩壊から近代の水平社会の実現へと移って行った。それは同時に、人間が他の何者にも支配されない、さらに言えば神にも支配されない自律性（自由）と人間による絶対的合理的な自然へのコントロール（支配）の主張に導いた。この人間の自由と支配の原理によって、地上（自然）は人間の自己実現の場となり道具となって、神の手から人間の手に移ることになった。（**教会と天国の障壁の崩壊**）

②市場原理による調和——神はこの被造世界を創造し、それを自らの意思の下で摂理をもって支配しておられるという摂理信仰は、この世は人間の自己実現の場と考えられるに伴って、地上は確かに神によって創造されたが、今は人がこの世を自由に支配することによって秩序を保つことができるとする理神論 (deism) にとってかわられた。その背後に、人は良き生活を自己のために始めることで罪から免れ (自己免罪)、自己の理性に従う (自己啓示) ことでその良き生活は全うされるとする人間信仰が存在する。

この理神論はアダム・スミスの“見えざる手” (invisible hand) という考えに最もよく表わされていて、経済全体の調和は神の摂理によって確保されていると言わないで、市場のしくみが全体を調和させるように十分に機能することを“見えざる手”と呼んだのである。神は世界の創造という点で登場するのみで、現実の経済社会はこの市場の働きにより、個々の利己心にもとずき自己の利益を追求する時、分業、貯蓄投資、消費、資本蓄積をへて、国民全体の富を増大させ、利己心の追求が社会全体の豊かさにつながるという、経済学の初歩的知識が与えられる。(運命と摂理の障壁の崩壊)

③自然法への依存——理神論と軌を一にして、神の支配が必要でなく経済法則がとってかわられる時、この世の法則が神の存在とは独立に人間共通の自然法として容認された。それは中世において聖書から導き出されるとして適応されていた公正価格や利子の禁止などを廃棄し、市場価格を公正なものとし、政府が法によって社会秩序をつくりあげることが正当なものとした。市場経済の基盤をつくる市民社会における法秩序をつくりだすことになる。(運命と摂理の障壁の崩壊)

④功利主義の道徳——各個人の利己心にもとずく効用の大小によって道徳上の善、悪、正、邪を判断する功利主義の立場が、先の②からの直接的な結果として、何のためらいもなく是認される。むしろ、このような個人主義を徹底することによって、社会全体の最大多数の最大幸福がもたらされ、人間の物的豊かさの追求という近代社会の利点がフルに発揮できるとする積極的な主張がなされる。そこには、人間の行為は動機によってではなく結果によって評価すべきであるという、人間の行為に対する神への責任の自覚の転換をみることができる。しかし、これは同時に人間の責任をあいまいにするという問題をはらんでいたことは言うまでもない。(教会と天国の障壁の崩壊)

以上の①～④の青写真に生命を与えるものとして、中世における楽園喪失と新しい楽

園（天国）への希求を転換させ、地上の楽園到来を夢見る信仰が要請されてくる。

⑤新しい楽園（パラダイス）へのイメージ——18世紀に入ると、啓蒙思想という神ではなく人間の光がヨーロッパを照らし始めた。自然科学のなし始めてくること、経済活動の拡大と地理上の発見などを間近に見て、人間は自己実現と自己改良をへて、自己の合理的洞察と判断力に深い信頼をよせるとき、人間が真の人間となる完全性への歩みは、現実の地上の生活によって全うされると考え始めた。合理主義の立場が神を追放し、進歩（progress）をその位置に据え、この進歩が人間によってなされるとともに人間の中にもなされ、将来においても継続して起るといふ信仰を生み出した。まさしく合理主義の勝利である。

こうした事態は、中世社会に普遍的であった、キリスト教におけるエデンの園における楽園喪失から再び天国を呼び求める信仰は力を失い、パラダイスは地上において連続的に望みうることになる。啓蒙派のパラダイス・ロストのイメージはキリスト教におけるものと無関係ではないが、どちらかと言うとストア派のパラダイス像に類似している。ストア学派の人達は、過去にあったパラダイスは失われており、それを取り戻すのは①共有財産制、②人間労働の果実の完全な享受、③公平の実現、④国家の死滅といった形をとるといった地上の制度上の改革が人間の幸福につながるとした。失われたパラダイスの時代（黄金時代、golden age）はこれらが具備されていたと考えていたのである。

こうした制度改革によって楽園を再獲得することができると思えるなら、まさしく啓蒙思想は打ってつけということになる。人間の实用主義的な知識によって、制度を改革し人間を改良し、よき未来に不可欠な科学的に基礎づけられた技術進歩（innovation）によって、豊かさを増加させ地上に楽園を建設できることは可能となる。こうした進歩に信頼をおく進歩信仰は、革命を通じての社会改良に対するエネルギーを生みだし、それはフランス革命、さらにはロシア革命、ひいてはナチス・ドイツの社会革命に到る原動力ともなった。従って、進歩信仰は単に資本主義を生み出すにとどまらず、資本主義と対立すると思える社会主義において、さらに言えば社会主義においてこそ一層その力を発揮してきたといえる。

なお一言つけ加えると、啓蒙思想は理神論すら抜け出し、キリスト教教理への攻撃という反キリスト教の態度をとるが、それは国によって色合いがことなり、フランスにお

いて強いものの、イギリス、ドイツではそれ程でもない。イギリスから独立するアメリカ革命では、キリスト教ピューリタニズム、理神論、進歩の理念の結合といった形で独立宣言がつけられていることからそのことが言える。(楽園喪失の障壁の崩壊)

以上第1部が全体の5分の1の50頁であり、残りは以下2つの節に分けて紹介するように第2、第3部と第4部は量的には各100頁になっている。

5. 資本主義の成立・展開と進歩に対する失望

産業革命の到来により資本主義は花咲くことになるが、これまでのことをまとめると、個人主義的合理主義に経済的物質主義(ある種の唯物主義)が露わになり、それらに先立っていたキリスト教ピューリタニズムがまざりあったところに、進歩信仰が一層の自己実現、自己検証を求めて行動への革命的力となって火を点じて、産業革命がおこったと見ることができる。それを背後で支えたものが進歩の具体的源泉である技術革新であった。

著者はここで産業革命の評価の視点を明らかにしているが、それは進歩信仰をどうみるかにかかっているという。著者はクリスチャン、とりわけ宗教改革のカルヴァンの立場に立って、経済発展はそれ自体固有の位置づけがなされるべきであって、教会や政府による規制は排除されるべきであることは認める。ただ、経済と言えども神の被造世界の秩序の中にあり、人間は創造されたものの冠として、この被造世界を神の規範に即して治めるようにと任務を与えられた財産管理人(steward)であることを自覚し、経済の発展の可能性もこのスチュワードシップ(stewardship)にのっとってなされるべきであるという¹⁾。従って物的幸いを増すようにと創造時に与えられた力は、自己の自我や誇

1) 本書はキリスト教の立場によって書かれているが、キリスト教の教えや聖書の引用がほとんどなされていない中で、この個所は著者ならびにカルヴァンの伝統にあるカルヴィニズムの立場から経済を見る中心的視点であるとして、聖書とカルヴァンの聖書注解を引用している。(pp. 64—65) スチュワードシップについては旧約聖書創世記2:15 “主なる神は人を連れて行ってエデンの園に置き、これを耕させ、これを守らせられた”という個所に起源をもっており、カルヴァンはこの個所を注解して「神がわれわれに享受すべく与えられる良き物を注意深く使い、各人はすべての持ち物について神の財産管理人(God's steward)であることを心得るようにしなければならない」という。(渡辺信夫訳『カルヴァン・旧約聖書注解 創世記I』新教出版社、1984年、70頁)

りを充たすのではなく、財産管理を託した神への応答として隣りに仕えるためのものであり、そこにおいて経済生活は神の前にある人間生活全体の中に正しく位置づけられる。

真の経済生活とは、以上の意味から、経済生活を人間の連帯の表明や人間の霊的共同体のあらわれとしてとらえ、神、隣人、連帯、公平といったことを考えることからなり立つ。神の戒命は相互一貫性をもったものであって、経済生活といえども、それを通してこの規範の同時的実現が起った時のみ、それ自身の意味と重要性をくりひろげることができるのである。産業革命の延長上にある現代西洋社会を診断する際、この一点に立って事態を検討する時、問題が自ずと明らかにされる。

著者の批判は生産技術の拡大・革新や生活水準の向上そのものにあるのではない。従って、こうした目標が歴史的に最も効果的に達成可能となった資本主義体制そのものが、ただちに問題になるのではない。問題はほとんど絶対的といってよい位の優位性を技術的工業的生産におき、専ら技術的経済進歩のみに向うような生産形態をとらせることになったものが何であるかという点である。進歩のためには経済成長と技術が独立的自律的力、既ちそれ自体で孤立して十分且つ善なる力となることを認め、それに資本主義を基礎づけた点である。

本来、経済的技術的力も倫理と社会正義の規範に関連づけられているはずであるが、進歩が第一と考えられた結果、それらは進歩に従属した二次的なものへと後退した。倫理と正義の規範が経済生産が起った後にその役割が認められたために、工業化の過程で許し難いことが生じることは、ある意味で当然といえる。こうした進歩第一こそ進歩信仰そのものであり、産業革命とその後の資本主義の展開がこの信仰に裏打ちされている限り、産業革命に対する評価はバラ色ではない。

ただし、資本主義初期の技術革新にもとづく驚異的な経済的变化と生活の物的豊かさは、進歩信仰を大衆に浸透させ増大させるに足るものであり、また産業革命に対してもそれ程大きな攻撃はなかった。しかし1850年頃を境に特にマルクスの登場によって、思想的にも実際の場にも大きな批判にさらされ、資本主義自体も急激な変化をみせ始める。

マルクスは確かに重要な指摘を行った。とくに人間疎外という点から資本主義批判を行ったことが重要であるが、彼は人間自身が自然に対して積極的に働きかけることによ

って自己の方向を決め自己実現を可能にすべきであるにもかかわらず、生産手段の私有制により労働者たる人間が自由な自然への支配から隔離され疎外されていると考えた。従って、この疎外から解放されるには私有財産制の廃止という体制変換という形が結論され、資本主義を全面否定してしまう。ここからマルクス主義の激しい革命信仰が生れてくる。また、マルクスの歴史観である唯物史観は、結局のところ、人間の完全性への深い信頼と技術進歩信仰に基づいているという点で、資本主義とその後に来るべきと考えられている社会主義とは啓蒙思想の進歩信仰によって生み出された憎しみ合う兄弟のようなものと考えられる。

このようなマルクスの批判をあびつつも、進歩信仰は科学、技術、さらに経済学で論証された経済進歩を現実の場に具体化する方向に向うとともに、それらを客観的に計測可能なものとして、技術革新、経済拡大それ自体を信仰の対象とすることにより、さまざまな批判の中で信仰が生きづけることになる。他方、19世紀の半ばには、ダーウィンの進化論は、進化を完全へ向う一つの過程と考えたことを受け、進歩は進化と重ねあわさり、人間を主体的なものとしてでなく客体としてみなすことによって、人間の尊厳から始った啓蒙思想は人間の尊厳を減じる方向にかじ取りを変え始めてくる。

以上の資本主義体制が客観的計測可能なものを具体的な進歩の指標とすることは、1850年頃を境におこってくる資本主義内部におこる変化において生じてくることである。企業規模の拡大に伴い企業は独立の生命体のように個人の手を離れ、進歩、成長は企業存続の不可欠要因となって、企業内部で技術革新と自己増殖をつづける。寡占、技術競争、宣伝による需要者の開発が一般化し、このような競争の激化は市場秩序の維持のために政府の介入を不可欠とし、さらにはケインズの登場によって一層の政府介入が正当化され、それまでの産業界と政府が敵対していたものが友好関係を結ぶ。この傾向は第二次大戦後一層強まっており、東西関係にしても南北関係にしても、西洋型の成長の尺変で経済状況を判断し、競争したり模倣したりすることがおこり、そこでの政府の役割も重要なものとなっている。

産業革命から現代に到る道筋をたどると、個人の経済における主権は減少し、進歩への要求に適応することが増大して、経済や技術的達成という点に人間関係や人間の目的を狭めつつあることを知ることができる。こうした傾向に対して自由主義や社会主義を

土台にした政党やキリスト教さえも、この進歩にのみ込まれていて、立場の相違は予想する程大きくなく、その影響力も進歩に対しては左程の力を発揮していないのが現状といえる。

現代において進歩が依然としてバラ色であるわけではない。かつて進歩によって自律した人間の主権を確立したにもかかわらず、今や進歩が主導権を握り逆に人間が従属し、進歩の創造者が進歩の従者に転落するという構図をあらゆるところに見ることができるからである。それでも進歩を絶えず続けて行くことが可能なら、そうした構図でもなお未来を見通すことが出来る。しかしそれも困難なことは進歩にひそむ脆弱性を見ることによって明らかになる。

著者はこの脆弱性を「環境」、構造的失業を生じながらインフレの危険をはらんでいる「体制」、進歩の中で翻弄される「西洋人」（人間性）といった三つの面からとりあげている。いずれも進歩を押し進めることによって、出口のない問題が生じてくることは、様々の形でまた様々な人々によって指摘されているところである。今や進歩そのものが問題であることが分っていても、進歩の力は超能力に近く、これを止めたり方向転換することが不可能であるという無力感が一種の恐れになっている。かつて「自由」と「支配」という人間の地上で求めた二つの理念は、進歩によって橋がかけられ相互に拡大するものであったが、科学技術の進展という進歩そのものを通して、この両者は矛盾して一方が押し進められると他方が著しくゆがめられる状況に到っているのが今日の段階である。

6. 社会の開示を通しての展望

進歩信仰から脱却し新たな展望を開きたいにもかかわらず、進歩から離れるわけにはいかない現状を打開する道を呈示した人々がすでにいる。著者はマルクーゼ、アドルノ、チャールズ・ライヒ、ガルブレイス、ガボールと検討を加えた後、どの場合も人間が支配しようとする意思と自由になろうとする意思の抜き難い緊張をみることができ、道は容易でないことを卒直に認め、その糸口を何とか見つけようとする。

まず現在の西洋社会を「閉鎖社会」（closed society）と定義づけ、二つのイメージでその特徴をとらえている。第一は目的が一つで全てがそのために造りあげられている「宇宙船」や「蜂巢」社会であり、第二はその目標が終点の光であってそれに向って進む「ト

ンネル」社会であり、光は将来に輝いているにしても今は見えない。その場合、一つの目的というのは、経済、科学、技術で一体となって進歩を求めているということは言うまでもない。ただし西洋社会がこのような全くの閉鎖社会というわけではなく、産業と国家、家庭と教会といったものが固有の責任を負っているものの、イメージとして二つの例示された社会に近いことは否定できない。

閉鎖社会に展望を開こうとする場合に、何よりも必要なことは、その社会の開示（disclosure of society）ということである。そうした新しい方向づけを行うためには、進歩以外の人間生活の意味と価値を回復することが求められ、そのてだてとして①規範を活性化する、②文化的諸制度や社会形態に個人的責任を負う、③各人が外部からの無法な力から自由になることをあげることができる。

それでは余りにも具体性に欠けるから新しい社会の青写真を示せということになるかも知れない。しかし社会の開示は専門家の特許ではなく、また実際には青写真は描けない。もし青写真を描き実行するということになれば、再び進歩ということにとりこまれ閉鎖社会に一層向う可能性をもっている。問題は開示のプロセスの重要性であって、できるだけ多くの人が発言し検討し、どの計画にも懐疑を伴うという相対性の感覚が不可欠である。さらに開示は短期的視野であってはならず、宗教的、文化的、構造的といった社会全体の視野をも備えている必要があるが、どんな開示をするかが先ず求められるよりも、何よりも開示の必要条件を探ねることが先ず求められるべきである。そして迂遠でも、その条件を一つ一つ整えることが開示への道を開くことにつながると考えられる。

開示の必要条件を探ねることは、かつて中世社会が近代社会へ移行することの障壁となっていたものが、どのように崩壊したかを知ることによって、現代の障壁が破られる（開示される）条件を知ることにつながると思えることから、中世社会の三つの障壁を再び順次訪ねて、その条件を明らかにする。

先ず初めに進歩が何よりも第一という進歩信仰は崩れそうで、すでに述べたように進歩がビルト・インされてしまっていて、固い障壁となってる。（**楽園喪失再訪**）

ここから2つの社会開示の条件が導き出される。

〔1〕 進歩の自己正当化に疑問を呈する。

〔2〕 発展の力を社会の究極的基準として用いるのを止める。

この結果として、進歩をもたらす経済成長のために、過大な経済、大規模技術が妥当視されているが、それらを反省する形で技術を見なおし、そのための技術に関するコード (codes) の開発をくわだてる。また、経済学、科学、技術は、それぞれ本来広い可能性をもったものであったはずなのに、今日ではそれらが一体となって物的経済的進歩を促進するために、科学は实用主義に引きずられ狭隘化し、技術も同様に、本来は物質を自由な形にかえるものであったのに、この自由さを失い狭められており、経済学も市場において金銭ではかりうるものに限ってくるといった、全体が漏戸 (じょうご) のように口は大きいが、出口は進歩という狭いものになっている。これらも本来の広さを回復し三つの漏戸に遊びをつくる必要があり、必ずしも GNP や消費を豊かにしないが、人間性を回復したり、環境を保全したりして、物質的進歩の自律性から脱却し、経済機構に伸縮性を与えるといった、社会経済的立場に自由度が求められる。

これらの条件を充たして行く過程で上記以外のことも様々に考えられるが、要するに生産や労働を意味あるものにするために、非効率をあえてしのばねばならないかも知れない。開示を始めればコスト・アップによって生産量も減少し、国際競争力を低下させることも考えられる。従って開示は一国だけではなく国際的レベルで進める必要もある。

次の開示に対する障壁は、市場による調和と自然法の支配である。(運命と摂理再訪)

ここで最も重要な問題は市場の自由な行動によって人間の自己決定の無限の拡大をはかったかに見えて、その実、市場は解決不能な問題を外に放棄することによって、却って人間の自由を縮小するという無制限の自由の逆説がおこっている点である。それは何よりも企業の市場における行動において見られ、企業が市場の競争を自由に展開する過程で、公正の問題を自己の責任から政府や民間の慈善団体、教会へゆだね、結局企業の自己責任を狭めた。経済第一、公正、道徳第二 (副次的) といった規範の同時的達成の断念が起っている。このように社会的規範に同時に応えないで、分けもつ形をとれば、人間の生き方はそれだけ豊かさを失っていく。

こうした政府等に企業の責任を肩代わりさせることは、擬似規範による擬似解決をもたらしているだけであり、政府がよって立つ規範の正当性を保証するものを見い出すのは、企業レベルや個人レベルよりも遙かに難しい。このことから社会の開示の第3の条

件が導き出される。

- 〔3〕 道徳、公正、技術及び経済に関する義務的で破られない規範に従って実行されるように、社会の生産部門に直接の完全な責任を導入すること。

この条件に従って行く時、企業は少なくとも市場や市場に関するものについての法規制だけではなく、経済がもっている先に示したスチュワードシップの規範、あるいは技術についても技術が本来もっている意味と規範、さらに道徳と公正の規範にも従うことが求められる。もちろんこの場合の規範が共同の知識となり、それぞれによって承認されていることは当然である。規範を守るためには公共監視のしくみもつくりあげられる必要がある。

こうした状況はもう少し具体的に提示されているが、そうした結果の企業の姿の一端を示せば、成長拡大の基準から質的生産の尊重への変換、競争は市場における価格に加えて、企業が公共的尊敬を勝ち取ることに求める、生産過程において金銭的犠牲をあえて引き受けても人格的創造的な方法がとられる、責任あるスチュワードシップが求められる分野の仕事は政府が中心になってはならず企業によってになられる、物的拡大をひかえる、小規模生産への方向転換といったこと等があげられる。これらは企業に求められるといったが、それを構成する企業家、労働者、資本供給者のそれぞれに求められていることは言うまでもない。

最後に、水平社会と功利主義の道徳の障壁に移る。(教会と天国再訪)

これがある意味で最後の決定的障害であるが、これを開示する条件は次のようになる。

- 〔4〕 労働と人間の規範的責任についての見方を含めて、功利主義的幸福の地平を根本的に打ち破る。

功利主義への批判は、経済学批判においてこれまでさまざまに論じられているので、これ以上取り上げる必要はない。問題は水平社会の中で、規範は自己自身の中にありと見え、その規範も功利主義によりつつ、人間の自律的自由と自然に対する無限の支配を可能にする点であるが、これについても人間に対する思いあがりやを批判する声は高く、現にそのことで様々な問題が指摘されていることでもあり、水平社会の障壁もくずれそうな気配である。しかし、それではどんな規範によるべきかとなればほとんどまとまった形のものではでない。結果的には従来のものが力をえて依然として障壁がそそり立

っている。

著者の立場は再びここで鮮明にされてくる。キリスト者として、水平社会の問題は人間同志の間の水平関係にあるのではなく、神と人間との垂直的關係までもなくしてしまった点にあって、規範は人間に起源をもたないものであり、神の規範を被造世界に合わせるといふ神への応答に立ち帰ることから全ての出発があることを訴える。公正、スチュワード、隣人への愛といった規範が社会のしくみの中に組み込まれ、文化の目標と社会のしくみの方向を変え、科学、技術、そして経済が一層優位に立って増々閉じられた社会へと進むのを喰い止め、社会を開示していくことを願うのである。理想社会の出現を求めているのではなく、“本格的ないやしのいくつかの特徴”が社会の中で見え始めることを願っているのである。

以上の開示の過程と必要な前提は不完全であり、ましてや開示された社会の青写真はすでに述べたように示しえない。しかし、ここで大事な二点は、第一に、われわれのライフ・スタイル、文化、外観、生き方といったものをよく省察することであり、第二は、現在陥っている苦境を運命と見る権利はわれわれにはなく、歴史における責任はまぬがれないということである。従って責任の所在が不明確になり、責任への姿勢が低下していることに対して、社会を開示する問題を訴るゆえんがここにあるといえる。

われわれの生活の根本において宗教の根があることを認め、全生活の再方向付けと規範のあり方に真剣に取り組むべき時期が今きている。進歩信仰の危機の深さ、その信仰の無意味さがもっているむなさが蔓延しているからである。人間の自律性に一層依り頼みながら天地を攻撃しつつけるか、天地の創造者であり初めに意味を与え新しい地をもたらす^{かた}方の与えた規範に方向づけられるか、われわれは常にその岐路に立たされていると著者は訴えている。

Ⅲ 評 価

著者はキリスト者として、とりわけカルヴァンの伝統に立ちつつも、全体を“説教調”

-
- 1) ここにも聖書が引用されていて、新約聖書の有名な「放蕩息子」のたとえ(ルカ15:11—32)から、放蕩息子が放蕩のはてに“本心に立ちかえった”ように、現代文明が立ち帰るべきことを指摘する。(pp. 243ff.)

で貫ぬこうとしたものではない。とりわけ、著者が経済学の革新を考える論稿で明記しているように、「キリスト教経済学」を打ち立てることは全くこころざしていない。キリスト者であろうとなかろうと、共に立ちつづける共通の土台の上で問題を展開しているのである。この書のテーマは、資本主義はウェーバーと同様、キリスト教と密接な関係を持って生れたことは認めるにしても、その宗教的核心は、地上の豊かさと人間の自己信頼に貫かれた進歩信仰であり、それが揺いだ今もなおそれに頼らざるを得ない社会、これが西洋社会（western society）であるが、この信仰の形成と社会の状況を実証してみせるというのが前半の意図であり、後半はこの閉鎖社会を打開するてだてを示そうということにある。

進歩信仰という言葉を用いるか否かとは別に、啓蒙思想がもって来た信仰に近い信念については多くの人々が指摘しており、これが現在の行きづまりの原因であることも言われている。ただマックス・ウェーバーの命題がかなり普及している現在、キリスト教信仰が資本主義を生み出すエートスならば、それが今日の倫理不在といわれる程の経済中心主義をなぜおこすのか、資本主義はキリスト教の鬼っ子かという疑問については、本書は一つの明解な解答を与えている。しかも、中世からの脱却は新しい地平を築いたが、教会とこの世が分離されこの世のできごとの背後にひそむ宗教的動因を無視する時、キリスト教でいう偶像礼拝がただちに生じて¹⁾、それが社会を動かす力をもったとしても、やがて行きづまりに達するという論証も説得力がある。

論証の正確さ、こまかい点には異論があるかも知れないが、以上の前半の部分は、好むと好まざるとにかかわらず、今日の資本主義経済の文化的行き詰りの解明としては、受け入れることができないとしてすまずことが出来ない。もしそうなら対論を必要とすると思えるからであって、対論もしないし受け入れもしないなら、著者が一番問題としている歴史におけるささやかな責任すらもはたそうとしていないことになる。

恐らく異論は後半の「社会の開示」の部分についてさまざまに予想される。現に、本書発刊と共に、この部分への批判が集中し、著者がいち早く改訂版を出して、それらと対論したことはすでに触れた通りである。この部分については多くの含蓄ある分析と

1) 「金銭を愛することは、すべての悪の根である。」(Iテモテ6:10)「食欲は偶像礼拝にほかならない。」(コロサイ3:5)

示唆がなされて、紹介が極めて困難な個所であったが、ここで明確に採っているキリスト者の立場についての異論が最も大きなものとして提出されるかも知れない。

近代のプロテスタント・キリスト教は、人間の心の奥深い魂の救いという点で、カトリック教会が依然として教会組織中心の救いを言う中で、大きな貢献をしたことは間違いない。それがキリスト教を良心宗教として社会の中で一つの光としてきたことも事実である。しかし、この心の内奥の問題と社会経済の問題をどのように橋をかけるかという点では、今日依然として不明確なまま、無力感をかこっていることもまた事実である。著者はこの点、カルヴァンの伝統に立って、無力感ではなく、たとえささやかでも経済問題の中に、キリストの光と力を与える道を示そうとしていることは、キリスト教界に対するチャレンジであり、ささやかであっても世に仕える姿勢をみることができる。その意味から、経済の諸問題において、消費者一人一人のあり方、労働者として労働運動や、職場あるいは働き方そのものといったあり方、経営者の責任、経済問題に対する政党や政府の取り組みなどの中に、無私で“本心に立ち帰って”問題の中心点を見据える目を与えられることは、いつの時代でも必要なことである。しかもこれは聖書による直接的といった風な説教であってはならず、具体的事象の分析を通して与えられるものである必要がある。著者の試みが成功しているかどうかは、第一にこうした役割をはたしているか否かにかかっている。

評者は、著者とほぼ同じ立場に立っているため、共鳴しこそすれ反論すべきことはなく、むしろ積極的に学びたいとする思いが強い。ただ、「社会の開示」の条件設定は広範な部分と例示を通して触れられているため、論じ足りない多くの部分があり、その点でここでは全体の見通しを示そうとしたことに利点を見るべきであるという感はまぬがれない。また西洋社会の模倣であるためわが国社会にもほとんどの点があてはまるが、こまかく論じはじめれば、日本の特徴がさまざまに浮びあがってくることは当然であり、筆者が新たな挑戦を受けている点でもある。